



閑美驚奇談傳

編

四

~ 13
3156
3



へ13
3156

美英新編

橋源

開卷驚奇俠客傳第壹集卷之四

新儀



東都 曲亭主人編次

第七回 七里濱の洪波衆悪を洗ふ
千葉城の土療潮毒を埋む

再説妙算の兼胤の啓行を折戸の頭目送り果ては早朝の炊爨の擲
導の爲の迷はるる。兩個の雑女飯と薦をその身の起りの準備の當下雑女
們のいさかき。這回身身の挿れ昨夜息子を走らす殿注進のいさかき
聞きて詳し知るに。實に其身の女丈夫也。智慧才覚の逞し。今は其の
あつね。最愚多。咱們のいさかき。元條の所も。試の回す。其のいさかき
うち笑ふ。その何のいさかき。不快々回せり。と。これに雑女ゆれ。那陀花
は比殿も死す。賜り。これに這替。そのいさかき。其のいさかき。其のいさかき。

平惣治

南無

東都傳第一冊六日

まうて荷桶の穴を擔以てある。薬酒を故意酔首へ飾て那自方も。属
 めのい其麼も。その庵を置れも自坐の荷桶の容るも。此彼を陀々花酒も。小
 途を垂て還を求め。その進退料の旨も。後学の為も。願ふ巨細も。
 不。や説示。めねと問。めらと。妙算の微笑も。領を身進も。那自
 方。主従の素より用心。深き。一日うち解。うと。飲食の意。附。薦。と
 ても件の酒。飽まふ飲。たも。然。老尼の初。これの所以。必。殿。の
 乞ひ。多。う。西。個。の。見。字。を。買。人。の。打。粉。々。攤。藏。の。件。の。藥。酒。を。擔。て。日。毎。這。里。
 卒。う。せ。の。深。死。思。慮。あ。る。と。め。且。豆。腐。を。買。の。酒。も。沽。て。這。二。種。と。負。方。の。薦。
 う。た。の。疑。れ。那。主。従。の。巨。量。と。一。件。と。喝。も。尚。貯。藏。の。一。件。あ。れ。時。臨。て。一
 う。ま。の。隨。の。醉。臥。を。せ。何。の。も。の。膚。せ。れ。然。と。酒。の。上。の
 徴。め。貯。藏。の。酒。あ。り。と。倡。う。這。里。措。れ。陀。々。花。酒。薦。を。欲。ま。う。獨。居。る。尼。が

いかり。ふ。ま。い。の。相。心。の。思。料。酒。の。あ。る。う。も。あ。れ。那。奴。們。必。疑。か。飲。む。た。も。飽。ま。ふ。の。で。も
 心。と。緩。ま。を。備。飲。む。の。ま。う。と。藥。酒。の。放。の。あ。る。も。あ。る。蛇。を。殺。と。頭。を。碎。き。遠。く
 出。宗。小。遇。う。如。く。悔。い。た。の。ま。う。と。後。の。深。念。の。の。如。く。後。の。後。も。考。て。那。負。方。
 この。ち。ま。這。地。來。つ。る。候。て。あ。る。を。看。る。豆。腐。の。要。あ。る。の。と。せ。却。船。藏。の。豆。腐。を。買
 り。て。形。の。ど。う。謀。り。め。那。主。従。の。折。り。這。頭。と。過。ふ。あ。る。が。俺。圈。套。の。空。と
 り。て。施。ま。ふ。り。ま。う。を。餌。取。ま。淵。の。釣。を。吞。れ。魚。も。も。得。流。を。引。入。れ。られ。の
 あ。の。た。造。化。那。們。の。運。の。竭。う。と。解。詳。の。説。論。の。初。と。曉。得。の。難。兵。の。さ。の。こ
 む。の。舌。を。巻。け。感。嘆。と。又。の。も。ま。う。の。左。右。の。程。の。も。の。の。同。門。の。あ
 妙。算。の。遠。く。行。装。を。載。其。の。面。個。の。雜。兵。の。引。れ。立。か。ん。と。折。忽。地。に。折。り
 中。御。堂。の。殿。より。賜。り。の。陀。々。花。酒。の。鮮。茶。一。貼。の。今。の。運。の。東。西。の。所。に
 せ。と。仰。ま。の。の。の。飲。料。の。旨。も。今。遠。く。あ。る。庵。に。遠。く。措。ん。ど。俺。の。懐。の。あ。る。

人の時臨く便利多る。失ふとも多るべし。然れども昔より韋面を因りて取らざらん。
 たるも件の鮮某の多りけり。正しく這裡の藏の措けたるは、のどく不思議の事。
 諸々上下を引返す。其の音も又ある。是れも備置忘れり。然れども、その餘の音も
 棚の隅も隈も、櫓櫓と既中七半晌なる。獨り焦燥の事。去向と急ぐ音も
 多る。何時も老人を等置く。此をけり。以て捨て草鞋穿締外に、引たる門の
 両折戸固鎖。遺落等々、杖の直に恥ぬ横巷路雜各二名連
 立。今宵の宿、何処をうち相譚々。薪樵を録倉を投てをける。案下某生再
 説千葉小并胤。新田貞方主従等。うち乗したる細轎子。許りの士平小成り。
 其の身の後陣の馬と。夜首の續々急ぐ程。采月二十一日の未牌の比、録倉
 心を着けける。いぬ日福草村。音途せ折走馬の使者を先たて。管領家注進
 廿録倉の執權憲定入道。銘と大々の事。と持氏に告げ、て専ら到ると

候ける。這日并胤来着。と管中の伺候。憲定且對面。功を褒美する。
 同小并胤。多る。演説し。女僧妙算の癖の趣。その子難藏。船藏等。と共侶深く
 首尾と送る。演説し。女僧妙算の癖の趣。その子難藏。船藏等。と共侶深く
 謀りて貞方を他が庵へ引入れる。一段の箇様。おひと。その才覚の捷れ。
 是如く述べる。憲定感心。泣く。御邊の大功。おひと。勸賞。その年。采宿望の
 望。侍所別當。補せられ。と疑ひ。又件の妙算。その女僧。その功賞。
 の。是亦宜く。御沙汰。おべ。就て老禿熟思。那貞方。幻術。又時種。
 カせの敵。と。え。一旦。藥酒の酔。も。輒。虜。も。久。録倉。
 措。その。藥毒。の。醒。て。逃。る。と。あ。せ。ん。後。れ。も。頭。の。
 の。然。れ。け。の。日。も。原。を。御。邊。の。人。馬。の。疲。劣。も。人。曹。を。依。り。成。り。と。
 六。七。里。の。濱。を。誅。戮。し。首。を。突。檢。入。れ。る。と。は。誤。て。ま。た。は。惠。ひ。ぬ。且

あまの趣と老木宜く披露の及ぶ。躬て御前へ召居べし。との折見。余々を以て下す。意中示し七形のてふ相計けり。然程小鎌倉の管領足利左馬頭持氏主。定入道の披露より。よを詳小めて喜悅お堪志。争亂の對面。同山に坐あり。執事上杉憲定入道長基を首とて。家臣石鳥佐氏。安房守憲基本の子。自餘の近習も扈從とて。整々とて。羅列。争亂の召れて拜謁する程。小持氏招近。この大攻の趣。執事の披露。具の字。新界世々の難言。追捕忽き。自ら隱形の御あり。有司們。擲捕さ。と。十餘年。過せ。和殿一己の才覚。自ら并の時種を。虜お。賞さ。則。這回の忠賞。侍所別當。職不就く。抑件の職役。右大將頼朝の時。和殿に。尉義盛。これ補せ。介後。義盛親族の。息。折且。職を。程。

梶原景時。假の當職。義盛の服闋。京時押へ。返。二世將軍頼家の時。梶原一族滅亡。義盛。職の復。其代。先蹤。の如く。容易。重職。和殿。秋。望。久。允。又。那。福。草。村。の。妙。算。の。女。僧。和。殿。の。助。功。極。美。の。宜。く。乞。小。依。并。小。女。僧。の。面。個。の。見。子。荒。海。難。航。船。藏。の。計。設。親。妙。算。と。共。侶。の。恩。賞。の。法。汰。の。義。の。執。事。の。談。せ。る。執。事。の。失。ふ。時。目。過。由。明。日。刑。戮。の。他。の。素。の。幻。術。の。氣。を。義。と。奉。て。畑。時。種。共。侶。の。頭。を。刻。へ。事。非。常。の。等。兩。の。計。丁。寧。の。宣。示。と。氏。憲。と。當。職。補。任。と。貞。方。誅。罰。の。御。教。書。と。此。彼。二。通。を。と。れ。の。争。亂。宿。望。一。時。の。遂。て。欣。然。と。受。戴。の。述。言。兼。と。馳。旅。館。

け。悠而千葉介兼胤の這夜もその身の士卒とて生虜自方主従と取の勢も成
らう次の日巳時の比より七自方主と畑時種を細轎子に乗る隨許りの士卒
ら田七十里の濱の岸のと居ませその馬の乗りと法場の赴く程の程の程を
彼此人の各足を空おと走りとその邊の果物の壁の皮の附く蟻のうも言ひけを
そ中の親を為ると。此も末の道を路考のあぬのあぬのけん建を傍ららるを
斬る自方主然も新田の嫡流也。南方武臣の棟梁も冠位四位の少將より
杖揺り搏く九萬里の道遙まよ大鵬も既の羽翼を要いり蟻の為の存せらる
那白龍の魚服も余且の細どりのけん項羽が力山を技作もその勢に窮りる島
江の舟渡も由事。これ畑時種が忠かと且勇も。現片糸の線も成らぬ孤堂の
鳴り巨ろ。新田の族の今る時の絶果ぬえんと喧れけ。修り一程小妙算の那難女們
とち連を。日毎路由ぬる。只管走る。這日巳時の半比鎌倉着れらる。

躬々兼胤の旅館不到兼胤の既ふたや。自方主従と誅戮の為七里の濱邊も赴
たる折々のるるれ妙算徳と修り介ら衆俺も亦多。那里も赴て。その為体と親
はあふ後々まの語柄もさるる言うん。粹果もさ。這里もさ。殿と俵の西女も。と
あふるるを難女們の耳に流る又立寄る走りの件の濱の到る。既小亭午の比るれ。難女集の
推も分が。然とも上の威と假ら。間近く進も。容易も。さ。得小出
家の憚りも。刑罰の場も面と露と。と。飲んとの相応ゆね。程も。所の鶴も。瞬も
せ。颯窺も。時小應永十七年秋七月二十日。あの日。朝も天結陰。秋氣猛小肌
膚寒。濱風大。吹暴。れ。岸打波の音。凄く。沙石の空宙。吹颯。ら。人。の。面。を
撲。か。群集の衆人。冷堪。と。威退。て。磯駒。松。を。盾。か。く。身。親。る。も。あ。り。心。を。な。さ。す。
見果。と。家路。を。投。て。還。る。も。あ。り。そ。中。の。妙。算。の。風。も。捲。き。波。も。怖。れ。人。の。杖。
疎。る。も。あ。り。と。倒。れ。身。の。幸。ふ。と。あ。り。と。進。む。け。既。小。時。刻。も。あ。り。と。千。葉。兼。胤。

長脚の
没奈何
明製
の没奈何
ありの製
作酒
異
漆柯
編あり
又あり
せむ

士卒の下知して四下近近衆人掃らその刃の登小尻を搦てさく非常に言れ雑兵
を慮五六百名白樫の棒を遣錯て埒と人々を看を登時兼胤海下知く貞
方主の時種を綱轎子より牽出さして敷草の上を坐する氣息の暢ふのまれば
多て跪坐くおのれ介錯のおのれを放せぬ地を礮と倒れ酒を盛る没奈何の燭の異
ねるおのれ兼胤を焦燥く雑兵の突立る棒二條を寄せて西三段小伎せし貞
方主の時種の胸と背を推加り七俗小突張らるるの像く小操りちりばむを
倒れさうけり荒海灘藏船藏の母妙算の功ふよと豫より主命ありその日は創
手すければ細鏢の甲も臍盾と糾芒の稜精悍く斫柄衣を脩刀を明晃々と
抜放ちて貞方主の背の方へ荒海灘藏杖より又時種の身邊へ荒海船藏
立よりたるその絆の為体凍くも亦哀れりしと怒る人各々胸を冷くと竊小弥陀仏
陀仏とせうく唱るものあり或は涙がごと背向るものありけり然程難藏と船

藏の貞方主の時種の項の後毛極揚て雙方齊一合直を刀の刃と振揚て既の
敷んと見あつる刀の光の疾電もどいあの時速くも猛吹吹る果風天をまを地城
動七小山の像に洪波あり澳の方より突然と七里の濱へち寄る疾と死前の如
一打洗して引返を激浪怒風の勢い誰う一個も脱免死斬りのもの斬りのもの貞方主
従荒海兄弟女僧妙算のいへの警固の士卒幾十名猶且群集衆人を殘
忍小く自らを知り他の患を樂むもの成信洪波の為小捉られ澳の水層あたり
けり故の兼胤も亦脱免死のきれ齊一彼の底を論を士卒
し海より暴浪の怒り揚られ濱邊の松小推り角の元まのまのま
潮水を飲され需要時の息も絶る似くこれあわわわの地方の民
稍人心地つれけり那高濤は只一度も濱邊一町の過ぎれば里人の屋敷
とらるるし兼胤のまをさうりなく人馬を波小極推れ身も後すのまをさうりけり

六



水鏡 卷之十

有徳 第十



兩涼一たは乃
至柔之水
征至剛人
うろもあを貝

水鏡 卷之十

有徳 第十

邊の民を送られて、獨旅館のり、留守せ、家臣の任々と、那水災の知る生息の
衆皆、胆を潰して、怖れ、そのまのけの且くと、兼胤の氣力、定めて、
さる思惟、許すの士卒、悲しく、惜び、返す、あられ、
種さ、波濤、捉られ、首、実、檢、入、り、願、不、難、赦、船、藏、那、主、後、
たる、秋、の、ま、その、誼、及、び、七、俱、波、底、論、那、高、濤、の、ち、寄、せ、ら、
速、之、瞬、間、の、ま、り、
然、れ、自、方、の、時、種、も、奇、方、の、酒、毒、醒、ま、ま、
れ、人、の、先、息、絶、え、
あ、ら、と、尋、思、
定、入、道、の、宿、所、
波、の、捉、ら、れ、る、れ、
九、死、の、中、
一、口、の、首、
実、支、虚、語、
よ、り、七、
敷、れ、後、
せ、
れ、水、
是、の、亦、
鎌、倉、
波、底、

九死の中、一生をゆき、い、
一、口、の、首、
実、支、虚、語、
よ、り、七、
敷、れ、後、
せ、
れ、水、
是、の、亦、
鎌、倉、
波、底、

時滅亡せしむる世奉て知る所之介る後世件の大刀の社と金龍とある。稻村は
 漁の在り漁者知るごとくその所を犯さば必出宗ありとのり。其の事なきに
 果てその夏あふ件の海龍甚昌縁を感て愛ふ做まると他貞方主従の爲
 致せ秋凡慮の及ぶ所あり然れどもそれらのよき世の人の知せざる。新田の餘類
 多く思ふのありのゆゑ秘して好む洩さず。因て思按を旋宗一時の水火多りとも
 當家累代の怨敵散り。新田の首級を暴瀆小捉れり。京鎌倉の威
 徳の薄ら必れが愉快ら。後那首級被瀆引れて一旦海を論むも日と降必の
 肝要あり。近国多。海邊漁村下知志。御邊も亦よく意を差着てそこを穿鑿
 入る。貞方時種の首級の。石を採研せり。物本ゆり知るとする。執権の

のれより。雨小きくもあつ。備やと。次の日。士卒と近海邊遺。新田貞
 方畑時種。首級の流る。その快取揚て。と来よ。部と定めて。涉獵せし。不
 第三の朝七里の濱。赴たる。雑兵が。那濱を。掘り。と。道俗二個の首。また。兼
 亂飲を。と。傍ひ。一箇々。これを。悪魚。也。傷ら。れ。これ。面。不。獲。也。見。定。め。さ
 れ。似。れ。も。疑。ふ。べ。く。も。あ。る。而。箇。の。首。の。灘。藏。船。藏。髪。を。首。の。妙。算。は。這。時。ま。そ
 兼。亂。の。目。の。妙。算。が。到。着。て。貞。方。主。従。の。誅。せ。ら。る。と。濱。邊。小。あ。る。あ。ら。う。而
 個の兒子と。折波濤。捉。れて。供。さ。け。と。初。て。曉。得。て。敬。篤。の。言。出。し。倒。小。外
 聞。テ。と。擡。遣。と。肚。裏。小。あ。ら。う。這。親。子。の。軀。の。失。せ。て。首。の。三。故。の。濱。邊。寄。り。一。悪
 魚の爲。小。噬。お。ら。れ。て。不。具。ふ。り。の。の。小。を。あ。ら。ゆ。這。後。も。又。流。よ。る。秋。寄。り。と。取。り
 の。こ。る。貞。方。の。首。と。索。え。り。這。灘。藏。船。藏。を。面。の。傷。を。と。事。ひ。る。ま。の。の。兩。個。の
 首。と。貞。方。時。種。の。首。級。と。票。と。七。実。檢。備。を。復。掩。面。と。起。す。呼。ぶ。り。と。母

思ひや計校既決りたれば、軀て件の兩個の首を首領飲め、士卒の多くて入憲定は宿所不赴下官連日彼此浦邊の士卒を出置て下知の首領困る形のぞ計
 けし、今朝の七里の濱邊まで、このふたりの首領を獲る悪意を思傷られ、此後
 共小瘡あれ、安定するぬ、似れども下官監定仕るを疑ふもの、其時種は
 首領をいよとて、実檢不入れ、為推及いよと、実檢入るの誘て、兩箇の首領をいよ
 憲定入道感悦、其少く老拙内檢せんを、猛席更也老黨を、近つて一
 箇々々首領の蓋を用て、熟視する、既ま久し潮水が清り、さう傷さの首領
 疑ひる、其あなも、辨胤認り、うら、今も、虚実を糾き、要する、其首領
 世の人の疑念、評論、解散と、之を泰平するべし、其あやと、詰り、同は、忽地、荒介と、あ
 笑て、千葉殿と、と、さ、入る、御邊證人、さう、是、其、時種、の、首領、を、誰
 ら、然、れ、潮水、が、乾、乾、と、傷、さ、れ、古、劇、在、と、上、の、実、檢、は、使、さ、る、濱、邊、の、鼻

あ、を、偏、り、障、り、鷹、揚、の、首、級、返、與、一、の、辨、胤、の、さ、う、の、果、て、七、里、に
 濱、邊、の、赴、た、士、卒、が、下、知、と、兩、箇、の、首、領、の、ぞ、小、鼻、さ、う、且、く、れ、と、成、れ、を、難、行、兩、三
 名、を、留、置、て、その、身、の、旅、館、へ、還、り、け、り、這、日、より、と、件、の、鼻、首、を、親、み、の、る、は、の、批、評、と、
 半、信、半、疑、せ、ら、稀、を、中、小、始、り、の、情、由、を、知、り、さ、の、あ、り、と、その、友、其、か、や、千、葉、
 殿、の、さ、あ、く、は、逢、計、策、を、旋、う、と、新、田、主、從、と、虜、小、さ、る、陽、の、忠、義、を、思、れ、る、陰
 め、さ、う、栄、利、を、さ、と、その、身、の、望、を、遂、ん、為、さ、の、故、の、海、神、の、祟、り、遇、て、幾、十、名、の、士、卒、を
 洪、波、の、喪、へ、と、る、海、懲、り、ま、ま、上、と、欺、り、歸、參、の、家、隸、難、癒、な、る、首、を、拾、ひ、を、其、小、と、こ
 且、と、自、方、主、從、の、首、級、と、詐、り、稱、し、軀、て、濱、邊、の、鼻、並、て、心、を、差、さ、と、其、人、一、個、の、
 ら、今、今、戦、国、の、常、情、を、就、中、甚、し、は、僻、事、の、あ、り、又、邪、妙、算、が、奸、智、の、長、を、
 佛、僧、の、入、り、夢、想、の、假、托、を、人、を、其、利、辨、胤、主、を、資、て、非、奸、計、を、領、主、を、
 為、す、あ、と、兩、箇、の、首、領、の、歸、參、の、願、い、を、果、え、と、の、所、為、る、れ、因、果、報、應、の、報、を、越、小

脱れ親子之名横死七祀られぬ鬼と云ふものも、（此の事、新田主従の身代り立られて、鼻首せられたるを、斬られ、遺理の事と推せ、新田主の終焉、又是の事なり。）
 代り立られて鼻首せられたるを、斬られ、遺理の事と推せ、（此の事、新田主の終焉、又是の事なり。）
 へん、（此の事、新田主の終焉、又是の事なり。）
 八月の初旬より、顔色漸々蒼蒼赤赤と成り、身體總て浮腫けり、鎌倉の名高は、（此の事、新田主の終焉、又是の事なり。）
 師と此彼と招れよとて、その宜は、就て服薬を醫者授けられ、（此の事、新田主の終焉、又是の事なり。）
 潮と多く飲れ、潮毒の致す所病症軽たまり、（此の事、新田主の終焉、又是の事なり。）
 養由あるもの、聊の效のあらぬ名僧驗者、（此の事、新田主の終焉、又是の事なり。）

加持と祈禱も術を盡すもの、（此の事、新田主の終焉、又是の事なり。）
 加持と祈禱も術を盡すもの、（此の事、新田主の終焉、又是の事なり。）
 年々千葉に還りて、（此の事、新田主の終焉、又是の事なり。）
 春逆夏も亦も、（此の事、新田主の終焉、又是の事なり。）
 板久の浦に漂流の外国人あり、（此の事、新田主の終焉、又是の事なり。）
 尋胤則光當其甲と遣と、（此の事、新田主の終焉、又是の事なり。）
 答を尋ふ、（此の事、新田主の終焉、又是の事なり。）
 経ると、（此の事、新田主の終焉、又是の事なり。）
 且と一致され、（此の事、新田主の終焉、又是の事なり。）
 死と等し、（此の事、新田主の終焉、又是の事なり。）
 悦夜も、（此の事、新田主の終焉、又是の事なり。）

主のさうとある。櫃の容れ主と埋まれば只の事。浮腫大なるを退治。蒼蒼の色の白くする。原來の潮毒の解散ある。衆皆齊一相賀と。杖けて玉より坐さんと。鬼より何の程か。息絶る。冷たざる果。果の事。人食。強に。依玉より穿出。又病林に臥させ。又上。鍼と。術を盡せ。三魂六魄既而去て。空蟬の殻と。人の甦生。果の悲愁の諸声を泣く。外の事。是の奸詐の悪報。將偶然知る。自方主と誅ある。その月その日。身を生ず。玉中の埋れ。息絶る。死罪人。異多。亦一奇事。ある。夫天道の善の福。又淫福。淫即陰。悪を惡と。淫と。淫の深意の。惡の素より王法の免さ。所と。天誅。侯。淫の福。故。

所故の人の知。云隱。隱。濫行。徳。幸。天。福。降。成。及。古人の格言。妙多。哉。ひり。少納言。入道。信西の博學。福を快遊。生ず。身と。土中の埋めて。禍と。脱れ。事。亂の。似。後。千。兼。介。入道。常瑞の時。至て。享徳四年八月中旬。一族。原。越。後。守。胤。房。馬。加。陸。奥。守。光。輝。等。攻。殺。されて。在。子。胤。直と。俱。不。自殺。折家の。舊記。焼。那。陀。々。花。酒。の方。書。也。這。兵。孫。火。燒。亡。れて。傳。る。事。あり。後。の。話。説。る。因。あ。具。也。も。勸。懲。本。つ。び。る。

第八回 衣箱を啓る小六遺書を得る 癩疾を救ふて著演銅井を失ふ

応永十七年秋七月下旬。新田貞方主従の事。近。御。小。隱。れ。彼。子。報。比。あ。り。世の人。喋々。え。く。の。ひ。て。罵。る。異。聞。評。論。區。々。り。け。程。不。藤。澤。野。上。人。著。演。宿。所。也。を。其。の。ま。ま。女。屋。の。も。知。る。あり。這。月。二十。三。日。の。朝。の。例。の。

親の古主と再従父兄弟の事新田の嫡家より
 念の念此後とありては能く時種一人を従へて
 争亂の變非たば僧妙算が邪智運た伎倆の程を
 栄き左も右も新田氏族の忠孝節義もいれ
 世に憤る意中の運懷真家堪た果敢とて
 常と報。秋曇の天さのの自半。昨の北下屋
 胸を連つち躰けを早き。病病言る母の心
 急を程。前回の事ありのあり。是れ別人
 けて。噫令郎只今還とせぬ。我咱の家の
 して既小津絶ひの快々還とせぬ。と
 事歎とる。小又問答の道も。二十町
 路。飛ぶ似る走り。小所小

先。宿所。合ふ。赴。操遣。屏風。
 枕外。母の空に。動と。声。渡。泣。けり。
 稲。小。小。小。小。小。小。小。小。小。小。小。
 窮。鉄。餅。餅。餅。餅。餅。餅。餅。餅。餅。餅。
 亡。迷。の。種。の。種。の。種。の。種。の。種。の。種。
 苦。提。苦。提。苦。提。苦。提。苦。提。苦。提。苦。提。
 後。九。浮。世。の。順。路。を。歎。く。思。ふ。似。れ。も。尚。老。朽。
 意。と。猜。の。表。裏。と。を。の。け。是。も。小。六。と。日。と。經。る。心。の。哀。を。方。が。只
 申。誠。心。の。表。裏。と。を。の。け。是。も。小。六。と。日。と。經。る。心。の。哀。を。方。が。只
 親。父。母。の。意。を。介。て。慎。め。言。ふ。出。さ。著。演。の。亦。る。意。を。取。て。裏。事。の。英。直。事。

その暇の折取分ち置かれと思ふ身と起と衣箱の鎖解披衣類此彼
と出たるふの固封封^{ふう}封^{ふう}封^{ふう}包^{ほう}一箇あり取揚てをる小重や丸へ何少あつて語りや
封皮と折たる推扱は^{かひ}一尺短刀あり小牌と結着て右少将の丸紀念菊一文字と書^あ
そ下小分注之三位の古殿四国下の折吉野の朝廷より恩賜の御剣是多とあてて
位の古殿と丸腸屋刑部卿義助卿といふあると奥国元年小那卿越の黒丸の城を抜く
吉野の内裡小分上^さ更^ま伊豫州へ出陣あるに折後村上天皇より賜りて物あるべし
猜せらる柄り玉成を夏雷と推並へらるる白鯊と鞠の黄金の草薙の後放りて熟
視るふ刃の長一尺あり多下^ち合直^あ直^ち鍔下より刃頭を入し視る小明る^あ
天小新月の雲^あ
我大皇國の鶏^あ
收めそ^あ復包の内なる小包の金子あり某の年某の月日

その暇の折取分ち置かれと思ふ身と起と衣箱の鎖解披衣類此彼
と出たるふの固封封^{ふう}封^{ふう}封^{ふう}包^{ほう}一箇あり取揚てをる小重や丸へ何少あつて語りや
封皮と折たる推扱は^{かひ}一尺短刀あり小牌と結着て右少将の丸紀念菊一文字と書^あ
そ下小分注之三位の古殿四国下の折吉野の朝廷より恩賜の御剣是多とあてて
位の古殿と丸腸屋刑部卿義助卿といふあると奥国元年小那卿越の黒丸の城を抜く
吉野の内裡小分上^さ更^ま伊豫州へ出陣あるに折後村上天皇より賜りて物あるべし
猜せらる柄り玉成を夏雷と推並へらるる白鯊と鞠の黄金の草薙の後放りて熟
視るふ刃の長一尺あり多下^ち合直^あ直^ち鍔下より刃頭を入し視る小明る^あ
天小新月の雲^あ
我大皇國の鶏^あ
收めそ^あ復包の内なる小包の金子あり某の年某の月日

よる預り... 要金三百兩と記着る... 小新田の... 一種の取揚... 一封の書翰... 母屋と標書... 折英直... 又假名川の旅舎... 八の理り... 知らざる果... 記着て秘置...

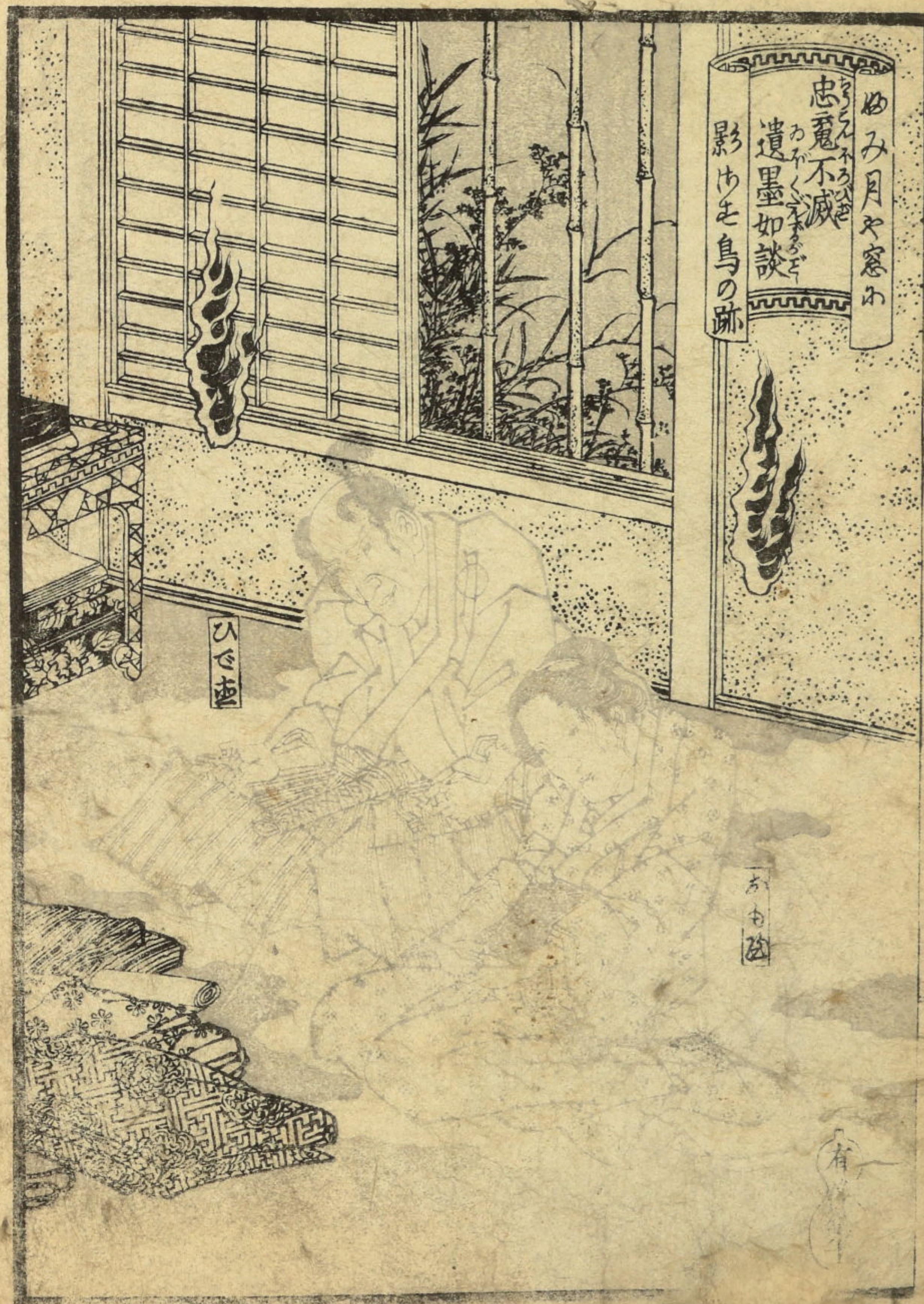
幼少より最も... 古殿の仰... 折小觸れて... 進退の恩... 忠貞節義... 然る感涙... 一箇小又取揚... 衣箱の底... 哉館夫妻... 金と有りと失...



芥子園画傳
卷之六

小六

芥子園画傳 卷之六



ゆみ月や窓の
忠意不滅
遺墨如談
影ゆま鳥の跡

ひで

あゆ

芥子園画傳 卷之六

俺身を野上と託す程嬰杵臼も及ぶ遠謀遠慮傳單之況母屋慎と深始
終良人の送命を守り忍びて馬脚と露をその身の命長々と豫の覚期不書
このふと
一、這書翰をいひて俺身小実の二親の在せしと知りあはれ任せ
金句毎錦綉るる俺身。俺生れ比母御前の世と去るのいよ先君子の陸奥成
落落さあの日まゝおぼえ強裸の中より館夫婦守字れける小六小六の名も相心
ゆの主従ありしとあはれも田舎の育の鶯の舊巢の中は杜鵑親るる親と親と暮ら
成長りの際世の起住いよのいよ礼の則八母あり慈母乳母も亦母之類育せし一年
来の幼勞も思へ恩高り。養父母も何ぞ不敗と家隸といふも悔れ八松
已前那藤白安同。這里来つる。胸窺折俺年甫の九也親の古主の冤家と
思ひければ躊躇て敷も果さ目免。今又思へ他の事足利氏の君父は讎言是より
心と盡まとも討とやく腹擦研て。這身大日本の豫讓と做て己の然れ養

家の恩人其恩を報せ身も隨ふ。君父不忠考あるも親家此
為不義かと思を仇と復索似る。忍びて死を心ひてを術と志も致め。恩報
恩の時と俟て這大望を果す。先考先妣姉母夫婦育る。其が憶念志願
聴る悲しむと身を投府と。言不出さ。忠孝節義の智慧も器量も世の人
まを男子が鳥屋出の雁鳥の修をみ。攬鎮て竊胸とぞ定め。恁而今茲も
元竹の世の真愛のを限る。あはれ十二月の初旬に至りて小六を母の目と胸を
泉秀武の眷屬の故郷へ還る。又鎌倉の事も。文学武藝の大なる
ら學得る。是れ是れ。是れ。是れ。宿所不在。讀書の古人を友と。獨樹影胸と尉
けり。明は永十八年。あはれ年小六十七歳。奴婢之助を八才ありければ。小学小令例に
ひて著者演春の比。奴婢之助に習せ。讀書の小六誨を。実語重子の二教を
学の窓に倚る。然れ小六と奴婢之助。実の弟と。親愛尋常る。あはれ

家入の御書一冊

奴婢之助も亦小六と莫ふて骨肉の異るを言ふ是不就彼つては小六の母屋に在りし時
 こもまればいひ出でし敷たる信夫がら又今やう思はれて心ひさふあむる男子も四方の志
 わり女子の封境をせむる時不祥の事れも他へ年来往方とて唯の還て家におり異
 日りの志願を遂て鳥の籠中を放れども四方の遊歴をたあぶのて信夫が在処をた
 環るもあかぬ遇の事も存亡を知るとあふ只も他が二親の徳を義報するごめん
 然る折も欲得と念ひの今この身めく做まては俺事とて不樂なけ。休題復説
 藤白棚九郎安同の事義隆主と敷捕りて年来鎌倉不在勤を程の便安利
 口の小人の生平の君の徳を知りて傲のれも献まるとあふ又と執權の使媚て使向
 と奴僕に似たりとて前代満義の時もと漸々用ひられて當所あり當主持氏も亦
 あれと飲んで去歳の秋九月の比相摸の眼代をせけれ軀と受領と隼人正なる外は是ら
 民の威權あり折るも檢の爲とて國中を巡るもあふ所毒を流と民の膏腴と絞

子人會怕とと虎狼のてく役の勝むと罪せらるもヨロのけの任の程の安同の
 年の冬十月藤澤を巡歴して邑長の宅を旅亭とら有一日の邑長とて其有演の
 事や。這回新眼代藤白隼人正當郡と巡歴せられて今某の村に在り宜く常例の
 矣。先例の所帯百貫毎の錢五貫とすも。這回十貫文と死れ。野上則藤
 澤南郷三千貫の所帯を三百貫文と出さ。と債らと著演の役を面直
 老女合の庵家の鎌倉將軍の始右大将頼朝卿の時諸役免許永代不日の御
 教書を賜りて以来今の管領家に至るまで常例の錢を東西の
 りて。後古例を蔑如と新法を建りて。某氏朝臣の死時より前代氏満
 兩管領の御家督の最初毎宜く古例に依るべと定のさせらる下知状あり
 這義を知らず非法とゆは是則黒吏の猶も七求るの只その徳心か
 職分ありと疎る誰不直とゆは其の爲も財を惜まざる樂に施せ

とも勝利の爲に權をばし一錢のちも費しざる。且這是非正と後、その理ありけり。
 らん然るに決て従ふべし。這義を以藤白主修へんと理あり。藤白主修は長
 阿容とて麻堂とて告別とて宿所あり。却安同とて若演とて従ふべし。
 聊料とてその大略を報へ安同とて大く怒とて訛る声あり。憎野上奴が過言
 なる今より七八年前つ比俺、此の好意とて那奴問ふ死とあり。あつて那奴赴けり。
 折のけり。強情張て後志理も過言の守捨とて。捕捕て鎌倉牽とて去んとてい
 とも折る那奴の親族の喪中とて勸解るより。その受あはせて免へり。先度不懲る
 不敬の奉動今への免とて兵們を俺爲し著演が宿所赴て捕捕て牽とて未
 快々甘とと敦圍死とと巴長かそと一兩個の故老と共とて推鎮とて免憤然
 當役初度の御巡歴に御士と罪多しとて。上の御沙汰あり。免且那史の先祖
 諸役免許の舊家あり。その祈りあるを奉れとて免とて。辨齊一諫ゆる安

とも同儕怒り治り。肚裏あり。那著演の舊家とて。歐圍ふ世を歴。御士に官事とて
 る。那奴口と利せん。その隨ふとて。這回の一談。私の意趣多し。怒り權を
 棄とて捷ん。現邑長們の。亦妙とて。異日便宜の折とて。二度の怒り
 復美とて。尋思とて。領して那御士奴が賢とて。答へとて。怖るその罪免とて。けられ。且
 故老の願ひ仕とて。目今その沙汰あり。俺が歸府の日。沙汰をあげて。その折とて。せん。と
 とも衆皆管理とて。多しとて。連累の出示とて。怖れ辭とて。書て著演が爲し。勸解あり。徳而藤
 白安同の極月初旬。その役果て。鎌倉君あり。この這回巡歴の趣。箇様々あり。せん。あ
 ば。相模の戸帳とて。あつて。納貢を増とて。又り。執權憲定入道とて。復美とて。聚
 飲の臣とて。悟ら。宜く披露あり。及び。管領家の。罷遇の。浅とて。且。休息とて。と
 賞禄恩賜とて。安同の。如く。民取。又君とて。得て。數千金の資財あり。富る。と
 考。俺今這金ありとて。鎌倉の宿所とて。酒色の爲し。用ひとて。その。上。私

ありとあらぬ故郷の錦を飾るとの古語もあるが今茲の妻子を携て氣賀ふ赴死く
 逗重の程酒宴遊貞の目と弥らるる年来の勤勞を忘るまふ樂い切べ。さうを
 可ふ思ひ起らる心永十八年の春三月の中旬の願書をたてまつて腰痛の病痾あつたり
 采邑氣賀へ赴死て七温泉ふ湯治せむ欲し。五十日の暇を賜り妻子眷屬のへらへ
 大磯小磯紅粉阪多。歌妓幾名あり。金を取せ相携て相摸の氣賀多。舊宅ふ赴
 死。是より日毎山海を。珠味を集る庖厨の玉と炊死桂を薪ふ。あつた。飽とを
 れ。夜も日の酒宴を度とて。那歌妓們が歌儂艶曲を。妻子と共ふ笑ひ與て且。這果
 在る程の肆月初旬のころ。這里あつて三伏の夏を銷する足と。底倉も采邑を
 那里の温泉ふ浴ふ。願ひ義の稱ふ。あつた。準備せよと。士卒と底倉
 遣ら。那里を。第一番と。浴室某甲が坐席を借して。家の奴婢の主人を
 他へ移ら。安同航て入替り。妻子後類送も。咸這浴室ふ取合と。驕奢の思

憚りたま。快樂ふ長夏の日。短と。却説の頃野上史著演の梅澤多。
 通家許佛支あつて招れ。本日朝より所要あつて出ると。時刻大後れ
 ぬ。今宵八那里止宿せと。留守を。晚稻と小六。女を。從者一名。遠く宿
 所。梅澤と投。急程。平塚の。花水橋の頭。必。黄昏。既
 多。其有演の橋。渡り。折。と。實。社伎の橋の上。倒れる。立。と。執視
 体。聊氣息の。呼。急病。氣。喪。あ。倒れる。あ。ん
 と。有。見。過。且。從者。抱。起。懐。九。飲。ん。齒。
 林。と。啼。婦。め。左。右。の。受。り。刀。の。挿。銅。牌。と。繞。口。と。推。開。と。件。の。葉。撮
 入。れ。主。從。齊。一。介。抱。と。連。の。喚。活。と。程。の。社。伎。の。稍。日。れ。あ。つ。て。動。足。と。縮。這
 主。從。と。と。の。且。忙。然。と。登。時。著。演。の。声。と。け。と。和。王。心。地。の。他。們。
 路。の。和。主。病。臥。の。忍。心。且。介。抱。と。の。本。復。せ。れ。と。本。意。の。慳。へ。宿。所

近く送り届けん抑何裡の人ぞと問て件の社伎の邊へ身と轉てはなれ願うた。
 原来元々の俺為思入を言ふにけり。下へ生得て癩痢の病病あり。
 久し水とる方と病持病忽地に成りて幼稚な時より船も乗らな水邊へ立よと
 下へあの身の不肖とひきまら。做まの毎ふ幸きて既ふ飢渴の迫りて身と投と
 思ふま水と息ひた持病を遺せり。先の程よりあふ事つ這橋の欄干に寄りて
 氣絶てくれぬあてで倒れけり。刀袷の介抱せられ惜る命根の
 ざうの面目もあはれおを。脚言まうと答る。著者演で嗟嘆堪左見右又のさう和
 主の讖悔不便之縁を身難病ありとも何まれ彼れ拵ひき獨の口只鯛を食。飢渴
 迫りて命を捨んとひひ最悪る。今より心と改め親あは親仕て孝行と盡し
 必天の恵ある同胞ある意見就て和暎と恃らる亦身と立るもあえ
 得るの人の身と棄て生れ申悲もき。あつら非命不縁を取る。永劫浮む願なるは

冥府の呵責とあはれせん。いともあはれとあつら。老婆親切に用ひらぬが幸ひ
 ろんと丁寧の説諭と。懐を搔撈りて圓金二兩取出。是の些少の東西も。羽立
 ようと本錢かき。拵が飢渴と脱と。あつら。取まれば社伎の呆るま。あはれ
 氣色あはれ。受戴て數回稍感涙を拭いて。神中人も棄れ死に救ふ
 ろ。押も馴染も。在下の本錢せよと。這金。賜す御恩の有。あつら。幸ひ人
 並に世を渡る日はあつら。貴宅へ推参て。あはれ。願ひ名告。あつら。
 著者演推林めて。あつら。口誼。俺後の報ひ。あつら。料
 ら。這里で。消せよ。去向。あつら。別れ。あつら。捨て宿所。あつら。
 さ。里。向。あつら。此。後。従者。あつら。実の。熱。比の。梅。澤。を。投。て。走。る。あつら。
 著者演。その。夜。通。家の。宿。所。到。り。遠。心。の。法。苑。列。折。を。あつら。銅。幣。を。原
 來。那。社。伎。の。茶。を。飲。せ。んと。せ。折。取。送。せ。せ。あつら。そ。を。俵。這。里。あつら。那。銀

順補丸

第一類のいり黄をみむくも足差ひきほふ

- 息ぎま下くあみぐく腎をくらふ
- のど氣がまきうめく寝るすべし
- 肩たまり背をあらはれ
- 惣身血のめぐりあひ
- 積さうあみ氣をくむ
- 常は大便秘けり
- 男女小兒の病



開卷敬馬奇俠客傳第一集卷之四終 治

銅斧で武士の武具を送せしむる所為多し

從僕止宿り詰朝未明起後者之

花水橋を來つ昆天分の明おける登時著演

要まのれ辞せし退るより主人おまうと

依の尚暗れ那銅斧拾ふと

腰をくす程を近里人のあつん一夥大約五六名一個の杜依を細く

牽を末おける這社



